

連載
第5回
福聚山史
篠原 重一
及川 一晋
編文

古記録に見る常円寺

1、『御府内備考』に見る常円寺

江戸幕府官撰の江戸地誌に『御府内備考正編』と『御府内備考続編』がある。正編は江戸市街の起立、沿革、旧跡、名家などを幕府自身が当時の参照できる地誌類を参考にして、また各所に編纂したものであり、続編は同じく江戸府内の寺院に関する記載であって、ここに『寺社書上』が利用されている。いずれも正・続編ともに我々が江戸時代の郷土を知るには唯一の資料となるであろう。

常円寺に関しては、正・続編ともにその記載がなされている。既に記した〔常円寺の起立〕の項においては正編の引用が主で、続編の引用は僅かであった。この続編については、後に記す〔江戸時代最盛期の常円寺〕で詳しく紹介したいと考えている。

『御府内備考』正編・続編ともに、常円寺の起立を天正十三（一五八五）年と記載しているが、実際にそのことを証明するものは何も残っていない。この項では常円寺の起立について、また新たに資料となる記録が発見されたので、前述についての補足も含めて行な

っていききたい。

『御府内備考』正編・続編は文化七（一八一〇）年からおこされ、文政十二（一八二九）年に至るまで、十九年間という長きに渡って編纂された。またその間、幕府の編纂責任者は正編の三島政行より、続編は神谷信順へと変わっている。それゆえ、『町方書上』と『寺社書上』とは、幕府に差し出した年代にズレが生じている。また、『町方書上』の作成者は町方の役人であるが、『寺社書上』は寺社の関係者といった具合に、別の人々がこれに携わっていたと考えられる。

これらの理由から常円寺の起立にまつわる話は、天正十三年に起立されて以降、おおよそ二百二十五年後の『御府内備考』が編纂された化政期までの長期間に渡り、地元の成子周辺の多くの人々の間に時代を通じて口碑伝えられ、信じられてきたものではなからうか。そのことに関して、一つの実証になり得るのではないかと思われる、次の文章をご覧ください。

『御府内備考正編』（巻之六十六 四谷之六）に柏木成子町の町名の由来が、次のごとく書かれている。

往古者武州豊嶋郡野方領柏木村之内二御座候、町名起り之儀者天

正年中、當町日蓮宗常圓寺と申寺起立之本人源左衛門と申者、先祖年曆不知、往古當町之末南側往還より少々引込民家補理……以下省略

上記には、その地名である『成子』についての内容が主であって、そこには常円寺の起立当時の様子が具体的に記述されている。しかしながら成子



江戸時代の成子通り(武蔵名勝図会)

の地に常円寺を誘致し、創建当時、開祖日立聖人を支援した最大の篤志家「源左衛門」の存在が明らかにされているが、その具体的な人物像については不明であった。そこで、『文政町方書上』を綿密に見ていくことによって、次の記述に出会った。

當町草創源左衛門先祖起立之儀は、年曆不相知候得共、常圓寺開基仕候源左衛門二候哉、寛永十七年正月十六日病死仕、戒名本源院圖設信士と申、田中源左衛門重俊と位牌二有之、其後寛政年中迄は、右子孫相統仕、伊太郎と申、當所南側自分地面二住居仕居候得共、同人病死後、退轉仕候

源左衛門の死については、江戸時代前期の寛永十七（一六四〇）年一月十六日と記述されており、それは常円寺の起立（幡ヶ谷からの移転）より五十五年後のこととなっている。それから百四十九年後、その子孫の伊太郎が病死する寛政年間（一七八九年）まで源左衛門及びその係累が住む住居が常円寺のほど近くに存在していたことになる。伊太郎の死から二十数年後、この『町方書上』が編纂されたという点から、源左衛門の死後の戒名、ならびに子孫の名など、記載されている内容はどれも事実にもとづいたものと思われる。この事からも「田中源左衛門重俊」という常円寺の礎を築いた篤志家が、実在していた人物であるといってもよいのではないだろうか。（つづく）